

今井源衛・春秋会

我身にたどる姫君

3



桜楓社

我身にたどる姫君
3

今井源衛・春秋会

今井 源衛 (いまい げんえ)

大正8年生。昭和22年東京大学卒。清泉女子大学を経て、昭和31年より九州大学文学部勤務。昭和57年定年退官。現在、梅光女学院大学教授。九州大学名誉教授。文学博士。

＜主要著書＞ 源氏物語の研究(未来社)・紫式部(吉川弘文館、人物叢書)・花山院の生涯(桜楓社)・王朝文学の研究(角川書店)・紫林照徑(角川書店)・源氏物語6冊(小学館、共著)・祐倫光源氏一部歌(桜楓社)・国文学やぶにらみ(和泉書院)など。

我身にたどる姫君 3

定価 一二〇〇円

印刷 昭和五八年六月一日

発行 昭和五八年六月二五日

著者 ◎今井源衛・春秋会

発行者 今井 肇

発行所 株式会社 桜楓社

御 東京都千代田区猿樂町二一八—三

電話 〇三(二九五)八七七一

振替 東京 六一—八〇二〇

印刷所 共信社印刷所

製本所 大日製本印刷(株)

0393—630614—0723 Printed in Japan

盗本には充分注意しておりますが落丁・乱丁などの折には小社あるいはお買い求めの書店でお試しください。

我身にたどる姫君 卷四

目次

凡 例 5

卷四

第一段 心離れぬ宿 八月十五夜、殿の中將^⑩と宮の中將^⑩、入道宮^⑩を訪問。 11

第二段 松風の声 殿の中將と宮の中將、嵯峨院^⑩に伺候する。 21

第三段 御方々の有様 宮の中將と妹麗景殿女御^⑩・入道宮^⑩・東宮母后^①・関

白夫妻^{③⑩}・嵯峨院^⑩などのこと。 24

第四段 物思うころ 九月十三夜、両中將心の中を語り合う。内裏火災。 31

第五段 さるべき契り 東宮^⑩・三条姫君^⑩と契る。水尾女院母子^{⑧⑩}、関白姫

君^⑩の東宮参入を画策する。 37

第六段 袖の上 九月末日、関白姫君東宮に参入。十二月三条姫君は東宮

御息所となる。 43

第七段 百敷の花々 新年、三条帝即位、関白姫君(藤壺)・嵯峨院姫宮(承香殿)

^{②②}ともに立后。殿の中將は右大将、宮の中將は權中納言

に各昇進。.....51

第八段 有明の月

権中納言⑩、一品宮⑫への手引きを大貳の君に頼むが、

叶わず。.....58

第九段 独り寝

権中納言、右大將⑬を訪れ、ついで父式部卿宮⑭に伺候

する。.....67

第二段 嵯峨野の秋

藤壺中宮⑮懷妊のため退出。三条帝⑯嵯峨の承香殿皇后

⑰に使を遣わす。皇后内裏へ還啓。.....76

第二段 御心うつり

麗景殿女御・後涼殿女御⑱・藤壺中宮それぞれの人柄。.....84

第三段 嵐の夜

権中納言、嵐の夜後涼殿女御と密会。.....87

第三段 細殿の夢

右大將、麗景殿女御と密会。.....97

第四段 葛城の神

右大將、権中納言を訪れ、共に我身院⑲に参上。.....101

第五段 茵の下

権中納言、後涼殿女御に恋文を贈る。三条帝それを発見、

秘密を知る。.....106

第六段 熊野詣で

権中納言煩悶。熊野詣でに出立。承香殿皇后退出。.....116

第七段	山階寺	藤壺中宮、皇子出産。……………	120
第六段	暮の雪	藤壺中宮内裏還啓、麗景殿・承香殿も内裏に戻る。……………	128
第九段	師走の月夜	麗景殿女御懷妊により退出。皇太后 ¹ 、後涼殿女御に同情。……………	136
第三段	院崩御	我身院 ² 崩御。麗景殿女御は女宮、藤壺中宮は二宮を各出産。……………	141
第三段	女帝即位	三条帝讓位。承香殿皇后即位し、女帝出現。……………	143
主要登場人物各巻別呼称一覧……………			150

凡例

一 各巻は、それぞれ適当に章段を区切り、現代語訳・原文・語釈の順に配した。

二 章段の小見出しは、仮りに付けたもので、原文にはない。

三 現代語訳は、本作品として初めてのものであり、一般読者の便宜のため、極力読みやすく分かりやすいことを旨とした。そのため、省略された主語・述語を補い、必要に応じて説明のための語句を補足した。

四 本文の整定については、特に留意し、左の要領によってそれを行った。

1 底本には尊経閣文庫蔵本を用いた。

2 底本の誤りは金子武雄氏蔵本（九条家旧蔵本）・宮内庁書陵部本に拠って訂正し、また底本・校合本ともに誤りと判断される箇所は、適宜改訂本文を立てた。共に右の箇所に*印を付し、「語釈」に注を加えた。

3 表記については、読解の便と原形への復元を考慮し、以下のようにした。

a 本文に濁点・句読点を付し、段落を設けた。

b 会話文には「」を付し、話者を（ ）で補記した。

c 和歌の肩は、底本では三四字下げで、歌末は次の地の文に続けられているが、これ

を改め、歌に続く地の文の頭は行を改めた。また（ ）内に詠者を注し、和歌の全巻
通し番号を付した。

d 底本の仮名に漢字をあてた場合には、「今の帝^{いまみかど}」の如くに、底本の仮名をふり仮名
として残した。

e 底本に用いられている漢字のうち、補助動詞（給ふ・聞ゆ・侍りなど）、助動詞（也など）、
助詞（物から・斗など）は、ひらがなに改めた。また、当字（木丁・大ぼん所など）、当字
ではないが意義に誤解の生じやすいもの（哀れ・の給ふなど）、及びひらがな書きが通常
であるもの（又・中々・猶など）は、原則としてひらがなに改めた。その場合、底本の
漢字は、「たまふ^給」「几帳^{木丁}」「また^又」の如くに傍記して残した。

f 反復記号（羅り字）のうち漢字の反復である「々」のみは底本のままとしたが、「く」
「く」は同文字を繰り返し、底本の形を「ことども」「らうらうくじく」の如くに傍
記した。

g 底本にない送り仮名や補読を加えた場合には、「明け暮れ[・]」の如く、その文字に
を付した。

h 仮名遣いは「歴史的かなづかい」を用い、底本の仮名遣いがそれと異なる場合は、
「ゆゑ^へ」「おのづから[・]」の如く、底本の仮名遣いを傍記した。

i dに従って、底本のかなに漢字をあて、底本文が「ふりがな」となっている部分
の仮名遣いは底本のままとし、「参り^{まゐり}」の如くに、歴史的かなづかいを（ ）で補記

した。反復記号の場合も「心」の如く、底本のままをふりがなとした。

j 底本における「む」「ん」の使用は混用されているが、統一せず底本のままとした。

k 字音語は、鎌倉期の作品ということも考慮して、底本のままとした。「承香殿」を「そかうてん」「しよきやう殿」と表記するときも統一しない。

l 底本の漢字で、必要と思われるものには（ ）に入れてふりがなを付した。

m 以上、従って、（ ）の部分を除き、ふりがな・傍記のある部分はそれをたどり、

本文改訂箇所を*で注意すれば、一応は底本文の姿に復元できることになる。

n 尊経閣本・金子本・書陵部本の間における異同は、最終巻に一括して掲げる。

五 語釈は簡潔を旨とし、引歌引詩の出典考証や、先行物語の影響関係の指摘などに重きを置いた。

六 右の場合、引歌引詩の典拠と見られるものは、「……に拠る」と注し、その典拠である確実性が比較的乏しいものについては、「参考」として掲げた。

七 原文の文章法・語法・語義などは、特殊なものについては注記したが、多くは「現代語訳」によって理解できると見て、語釈としては特記していない。「現代語訳」と「語釈」との重複を避けたのである。

八 参照すべき他の箇所の指摘に当たっては、巻序はアラビア数字、段序と頁数とは漢数字、行数は洋数字をそれぞれ用いた。たとえば、

Ⅳ 八段二五頁 8行

の如くである。また必要に応じて、段序のみによって示し、頁・行を省いたものも多い。

九 「鑑賞」欄は特別に設けず、必要ある場合には、「語釈」中に加えた。

一〇 巻頭の「梗概」・「目次」および「語釈」中、登場人物に付した番号は、主要人物を対象に、ほぼ登場順に付けたものである。系図を参照されたい。

一一 登場人物の呼称の中には、今般新しく命名したものも含まれている。

一二 登場人物索引・引歌引詩一覧・内裏図その他付図・用語索引・年立その他は、最終巻に収載の予定である。

卷
四

この図は、平安朝の宮廷制度と天皇の御所（御所）の位置を示すものである。図の中心には「御所」があり、その周囲には「内侍所」「中納言」「右大臣」「左大臣」などの官職の所司が配置されている。また、天皇の御所（御所）の位置も示されている。図の右側には「東宮御所」があり、その周囲には「中納言」「右大臣」「左大臣」などの官職の所司が配置されている。図の左側には「西宮御所」があり、その周囲には「中納言」「右大臣」「左大臣」などの官職の所司が配置されている。図の下部には「東宮御所」があり、その周囲には「中納言」「右大臣」「左大臣」などの官職の所司が配置されている。図の上部には「西宮御所」があり、その周囲には「中納言」「右大臣」「左大臣」などの官職の所司が配置されている。図の中央には「御所」があり、その周囲には「内侍所」「中納言」「右大臣」「左大臣」などの官職の所司が配置されている。図の右側には「東宮御所」があり、その周囲には「中納言」「右大臣」「左大臣」などの官職の所司が配置されている。図の左側には「西宮御所」があり、その周囲には「中納言」「右大臣」「左大臣」などの官職の所司が配置されている。図の下部には「東宮御所」があり、その周囲には「中納言」「右大臣」「左大臣」などの官職の所司が配置されている。図の上部には「西宮御所」があり、その周囲には「中納言」「右大臣」「左大臣」などの官職の所司が配置されている。

[注] ⑧ハ一五番和歌ニヨリ、⑨ハ一六番和歌ニヨリ、⑩ハ一七番和歌ニヨラテ、各今依リ二命名。
 (一)ハ再出ノモノ。⑪ハ夫婦關係、⑫ハ不倫又ハ異常ナル男女關係。洋數字ハ主要人物ニ付ケタ番号。

一 心離れぬ宿

八月十五夜、くまなく照らす月影に、氣もそぞろ浮かれ出すまま、あてどもなく誘い出されておしまいになったが、氣苦労のしがいもない御所の女性によしやうのことも氣が氣でないけれど、帝のお目にとまればおひまも頂けなさそうでやかかいので、たいそう人目を忍んで宣耀殿にお立ち寄りになると、戸口で話をするつもりだった女房は、その甲斐もなく、もう女御の御前に上っていた。人々は、「宮様も女御のお部屋でお琴などをひいてお遊びでございます」と申し上げるので、がっかりと溜息ためいきが出て、そのままお帰りになる。

麗景殿の東の所で、宮の中將がぱったり出会うと、「日（宮の中將）が暮れるとさっそく、帝が、『中將は早く来られぬものかな』とお尋ねでございましたので、『例によって行方知れずで、御心配をおかけいたしましたして。いまだにお探し出し申すことができませんぬ』と藏人が奏上したものですから、何もかも艶消しになって、帝は入御

になりましたが、まったく妙なものでしたよ。せめて今からでも早く参上なさいまし」という。(殿の中将)「とても気分が悪くてがまんできないものですから、出歩きもしないのですけれど、今夜はこうして閉じこもってばかりいるのもいくじがなさ過ぎると思って、気分の悪さをだましましたまじ夕暮時分に参内するつもりだったのですが、入道宮にながらくごぶさた申しておりますお詫びをお手紙で申し上げようと、それに手をとられていた間のことでしよう」、「(宮の中将)いいですよ、いいですよ。また御遊ぎょゆうでもあれば、下手な楽器を弾けひけと責め立てられて、夜も明けてしまう事でしょう。さあいらっしゃい。こっそりと人目に立たぬようにして外へ出ましょう。白駒の隙を過ぎる喩えのように短い人生だもの、つらくてたまらないなどと思ひ悩むのは止しにしましうよ」と、殿の中将をお誘いになるので、いかにも、とりとめもなく浮かれ出した心も楽になることだろうかと、連れ立って出た。

警蹕けいひつの声も立てさせずに、お微行しゆぎでいらっしゃるから、あれほどお探しになつていても気付く人はいない。殿の中将は、「それでは、私まで誘い出して、どこへいらっしゃるおつもりですか。同じことなら、少しは見所があつて結構だなと

感心するくらいのお忍び所へお供をさせていただきたいものですな。こんな晩方や夜明けの御隨身役などは私だってけっこううまく勤められるのに、意地悪く隠しだてをなさるとはね」と恨み言をおっしゃる。いかにもそんな事を申し上げたい気にもなることだろう。宮の中将は、「今夜は雲居の月もかえって月並な感じでした。何とかして思いがけず心を惹かれるような草の庵を探し出したいものだ」、殿の中将「私は、お父上の宮の許にうかがって、あなたのお琴の音もながらく聞いていないような気がしますから、琴をお願いして、今夜は夜どおし休ませてあげるまいと思っていました」、宮の中将「それはとんでもない事らしい。里でとはいっても、そうして二人でいるとお聞きにでもなれば、帝がまさかお召しにならないはずもなし。まあいいさ、今夜はどこそこにと人に聞きつけられそうもない山里の草の垣根にでも隠れて、夜明かしがしたいのですよ」、殿の中将「やはり都の中なら、入道宮はそれこそ人目もめったにないから、そちらへおうかがいなさい」と、自分が好ましい所だと思っているものだから、入道宮の方に車を寄せさせるが、宮の中将は自分ではどこがいいと特別思っている場所もないので、

こつそりと二人揃ってそちらへ参上なさった。

【原文】

八月十五夜、隈なき月影には、いとあくがれ出づる心にまかせて、そこはかとなく誘はれたまひぬれど、かひなき雲居のかげもなかなか心づくしなるものから、御覧じつけられ
ては、暇許されずやとわづらはしければ、いみじう忍びて宣耀殿に立ち寄りたまへれば、
語らふ戸口もかひなく、参うのぼりにけり。「宮もこの御方にて、御琴など弾きすぎはお
はします」ときこゆれば、あいなくうち嘆かれて、立ち帰りましたふ。

麗景殿の東に、宮の中將さしあひて、「暮れつるままに、『いつしかも参りましたまはぬか
な』と御尋ねありつるを、『例の行方なく惑はしきこえて。え尋ねあひたてまつらず』と
蔵人の奏しつれば、よろづは映えなくなりて、入らせおはしましぬるに、いとあやしうも
ありけるかな。今だにとく参らせたまへ」と言ふ。「乱り心地いと堪へ難うのみはべり
て、まかり歩く事もせねど、今宵はさてのみ籠りはべらんも埋れいたさに、あひたすけ
て、この夕暮の程に参らんとしつるを、入道の宮に、ひさしくかき絶えてはべりつる畏
り聞えんとて、立ち入りてはべりつる程ならん」「よしよし、また御遊びなどあらば、よ
からぬ物の音ども責めたてられて、夜も明けなんものぞ。いざたまへ。ただ音なく隠